

ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2022年12月20日

No.142



復元工事完了直後の旧府中郵便取扱所（旧矢島家住宅）。漆喰壁や2階部分につけられた「府中郵便取扱所」の看板が新しい。

もくじ

- 1-2 復元建物、郷土の森に建つ
その7…旧府中郵便取扱所（旧矢島家住宅）
- 3 最近の発掘調査
第六小学校で発見された縄文時代の落とし穴と調理跡
- 4-5 NOTE
野鳥報道ステーション環境維持が鳥を呼ぶ
- 6 展示会案内
特別展 多摩川のアユみ
- 7 多摩川今昔
③合戦の勝敗をわけた川
- 8 太陽系惑星ツアー
⑦見える？ 見えない？ 天王星

復元建物、郷土の森に建つ

府中市郷土の森博物館には、現在8棟の建物が移築・復元されています。小学校や役場・民家・商家等、江戸時代から昭和にかけてつくられた特徴的なものばかりです。ここでは、各建物について移築・復元された頃の写真でふりかえりつつ、それぞれの特色を8回シリーズで紹介します。

その7…旧府中郵便取扱所（旧矢島家住宅）

旧田中家住宅同様、郷土の森がオープンしてから2年後の1989年（平成元）3月、甲州街道を模した道沿い、旧府中町役場庁舎の隣に復元されました。1階入口横にアーチ形の郵便受付窓口、木製のポストが設置されています。

復元建物、郷土の森に建つ

その7...

旧府中郵便取扱所(旧矢島家住宅)

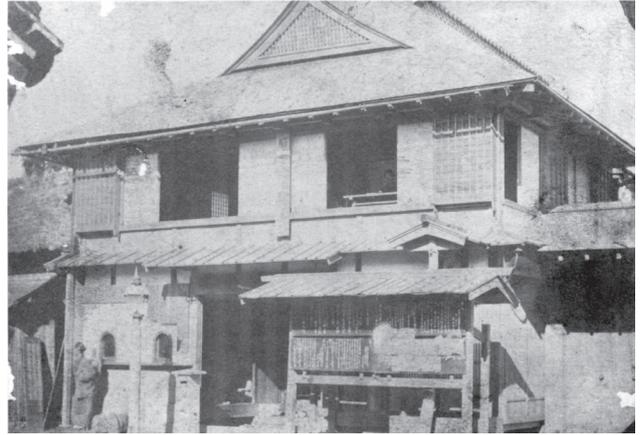
今回紹介する旧府中郵便取扱所(旧矢島家住宅)は、個人宅と兼用されていた建物です。この建物の持主・矢島氏は旧甲州街道沿いの番場宿(現宮西町)に住んでいました。当主は代々九兵衛と名乗り、江戸時代を通じ宿内で様々な役割を果たしていた旧家です。屋号を信州屋といい、府中宿内有数の旅籠を営んでいたこともありました。

明治時代初期、政府は郵便制度を定着させるために、全国の代表的な旧家に土地を提供してもらい、郵便事業を委託します。その結果、自宅を改造した郵便取扱所(2007年廃止された旧特定郵便局の前身)が各地に誕生します。そのような経緯で府中に初めてできた住宅兼郵便取扱所だった家が、この建物です。

矢島九兵衛は1872年(明治5)、府中で最初の郵便取扱役に任命されました。それに伴い、幕末～明治初期頃に建てられていた自身の住居に郵便窓口等を新たに設置し、郵便取扱所としたのです。この建物を利用した郵便取扱所は、1889年に別の家に業務が引き継がれるまで、17年間続きました。

その後矢島家は、不動産管理等の仕事をしていましたが、1922年(大正11)に同じ建物を使用し歯科医院を開業します。その際、それまで和風だった外観を洋風にリフォームしました。不要となった郵便窓口等はその際姿を消しました。

それから約60年が過ぎ、矢島家住宅は郵便取扱所だったことの価値を改めて見出されます。郷土の森博物館に移築復元する建築物を選定するため、1982年(昭和57)に作成された報告書には、この建物について「増・改築が多いが、明治期から大正期にかけての地方の郵便事情を偲ぶ貴重な事例である」と記されています。そして調査の結果、残っている間取りや部材、写真等から、明治時代の一般家屋としてだけでなく、郵便取扱所としての復元が可能だと判断され、郷土の



1879年(明治12)当時の府中郵便取扱所の様子

森敷地内に移築・復元されることになりました。

解体工事は1987年12月に行われました。そして1988年8月～翌年3月まで復元工事が行われ、旧府中郵便取扱所として再びその姿を現したのでした。ただし、諸都合から、もとは南向きだった建物を180度回転させ、北向きに配置しました。

復元の結果、歯科医院時代には下見板と呼ばれる板を貼った壁だったものが漆喰になり、窓ガラスもほぼ外され、明治時代の様相へと建物の時間が少し戻りました。

なお、この建物を「旧矢島家住宅」とも呼んでいることに繋がるのですが、復元されたのは郵便取扱所としての姿だけではなく、町の旧家としての姿でもありました。むしろ郵便取扱所としての機能は建物の一部であり、全体としては、府中の街道筋にあった旧家を明治～大正頃の姿で再現しているといつてよいでしょう。そして、同時代頃の建築として園内に復元された、旧府中町役場や旧島田家住宅(薬屋)と同じ道沿いで並び、町並みの景観再現に欠かせない存在となっているのです。(佐藤智敬)



解体直前の歯科医院時代。旧府中町役場庁舎のような窓ガラスと板の壁が取り付けられていた。

第六小学校で発見された 縄文時代の落とし穴と調理跡

天神町4丁目 府中市ふるさと文化財課 佐藤 梨花



発掘された落とし穴

府中市立府中第六小学校（六小）の発掘調査成果に関しては、本誌 No.139 で縄文時代の顔面把手付土器について紹介したところですが、2022 年上旬に行った調査で新たに落とし穴や集石土坑が見つかりましたのでお伝えします。

落とし穴と集石土坑は、どちらも縄文時代のもので、狩りに関係があるものです。縄文時代の人々は、シカやイノシシなどの動物を狩っていました。狩り際には、落とし穴などの罠をしかけていたものとみられます。

調査で発見した落とし穴は、平面が 180 × 100 cm の楕円形で、深さが 125 cm 以上もあるものです。六小の南には野水と呼ばれる窪地状地形があり、縄文時代には降雨の後などには水が溜まっていたようです。今回の調査で見つかった落とし穴は、この水を求めて集まる動物を狩るための罠だったのでしょうか。落とし穴の底面は 120 × 38 cm で、底に近づくにしたがって狭くなっています。シカやイノシシなどは、落ちたら身動きできなかったと考えられます。

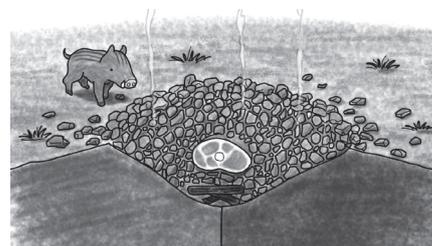
さて、狩りに関係するだろうもう一つの発見、集石土坑についても紹介します。集石土坑は、円形などの掘込みに拳大の割れた礫が詰められているものです。今回発見されたものは直径約 110 cm、深さ 48 cm の円形で、3.2 m の間をあけて 2 基が発見されました。どちらの集石土坑の礫も被熱して赤くなり、割れていて、さらに炭化した木材も見つかっています。穴の中に熱した石をつめて、何かを行っていたことは明らかです。

集石土坑は、肉などを石焼きや蒸焼きにして調理していた跡と考えられています。No.139 でもお伝えしたとおり、六小の周辺では縄文時代の集落跡はなく、今回の集石土坑は狩りの野営などの際に使われたと思われます。狩りをして、その獲物を調理して、一部をここで食べていたのでしょうか。

今回は、六小のこの場所で狩りをしたり、獲物を調理したりした人々がいたことがわかりました。食べることは生きること、縄文時代の人々の暮らしの一場面が目に見えます。



二つ並んだ集石土坑



集石土坑の想像復元

環境維持が鳥を呼ぶ



多磨霊園に珍鳥出現！ ベンケイヤマガラ

今回は市内の野鳥ニュースをお届けします。コロナ禍が続いていますが、実は都市のカラスにも影響したようです。ゴミ捨て場のエサにありつき、市街地に増えた連中でしたが、コロナ騒動で飲食店等に長期間の閉店や制限が及び、潤沢なゴミエサの供給が受けられず、数が減ったと言うのです。人が作る環境に、鳥が敏感に反応した例ですね。さて、最初的话题に移りましょう。

▼お帰り！ツバメ軍団

春先に渡来するツバメは、はるか南から繁殖のため日本を訪れる夏鳥の代表格です。人を恐れず、人家や商店街の軒下等に営巣し、子育てをします。毎年、皇居のお濠等で虫を捕えたツバメが、営巣する神田や丸の内等のビル街にエサを運ぶ様子を多くの人が見守ってきました。

しかし、1980年代半ばから都心におけるツバメの繁殖が減り始めました。地価高騰の影響なのか、営巣に適したビルが壊され、新築されるビルの壁面はツバメの巣材である泥が付着しづらいものでした。駐車場等ではシャッターが取り付けられ、出入りが不可能になりました。同時に、巣材としての泥や雑草が入手困難で、エサの飛翔昆虫

も減っています。見守り人の都心住民が少なくなったことも大きいようです。

都心同様に開発が続く府中ではどうでしょう。市街地に営巣するツバメは少なくなりましたが、市の南縁に沿う多摩川にはツバメの集まる場所があります。子育てに奮闘するツバメは、夜になると親鳥が交代で巣を離れ、集団でねぐらに移動して朝までぐっすり寝ます。巣立ち後のヒナたちも同様に行動します。そのねぐらに利用されているのが、多摩川のヨシ原です。当館近くの大丸堰より上流の四谷橋付近には群生地があり、府中野鳥クラブが2002年にこの場所のワンドで500羽を確認しました。その後も毎年順調に安定した数を記録し、さらには川を渡る鉄橋の橋脚に営巣の様子も観察されるなど、多摩川が来訪先に適していることを教えてくれました。

ところが、近年のヨシ原は度重なる大型台風の土砂や、北米原産のツル性植物等に覆われて狭まってしまったのです。2014年を境にツバメの姿は一旦消えてしまいました。そこで環境を取り戻すべく、野鳥クラブを先頭に早速保全活動が始まりました。根気よくツル性植物の除去や樹木の伐

採等を行いな
ら、努力を続
けた結果、ついに
今年8月に再び
500羽のツバメ
をこの場に呼び
戻すことができ
ました。人の力
で府中にツバメが再訪した明るいニュースです。



ねぐらに集まるツバメの群れ

▼ ナンダ? あのヤマガラ

2020年9月、多磨霊園内でエゴノキに止まるヤマガラの中に、少し変わった同種の個体が出現しました。ヤマガラよりも色が濃く、三宅島や八丈島に生息する暗褐色のオーストンヤマガラに類似する亜種にも思われましたが、この種の特徴である胸に見られる黒い帯がありません。頭部や背中の中も薄いようです。正体は、通称ベンケイヤマガラ。ヤマガラの変異種として昔から日本各地で稀に見られる鳥でした。全般的に行動が機敏なヤマガラですが、本種は牛若丸と弁慶が立ち回る動きに見立てられたのでしょうか? あくまでも勝手な想像です。

枝の多い遠くの場所でせわしなく動くベンケイゆえ、撮影を試みても追従が大変です。エゴノキの実の固い殻を両足で押さえ、クチバシで割って中の種を取り出して食べるのですが、たまに殻付きの種を啜って近くの枝に移動して来ます。冒頭の写真は、その一瞬を捉えたもののようです。多磨霊園は浅間山と連動して豊富な樹種が揃う特別な環境です。保安全管理に努める様々な人の活動の上に成り立っています。良質な条件に四季を通じて豊富な野鳥が訪れ、時にこうした珍種の出現と言う仰天ニュースが届けられるのは、まさに人の思いと行動力の賜物でしょう。

▼ アオゲラよ…お前もか!

さて、最後は当館での話題です。野鳥クラブの定例調査で、この度園内でアオゲラの営巣が報告されました。そもそもアオゲラはキツツキの仲間であり、一昔前までは市街地で見ることのなかった森林の鳥です。カラスやヒヨドリに倣って、本来の生息地が減少する中で、都市を新天地に選んで移って来た模様です。キツツキと言えば、すでに先陣を切ってコゲラも市街地に登場しています。道路沿いの街路樹等を上る姿は、すっかり都市に

同化しているようです。アオゲラはキツツキの中でも、体長29cm程の大型で、日本固有種でもあります。多摩地域では高尾山等で普通に見かけましたが、近年は都市部の公園に出没するようになりました。府中であれば浅間山や武蔵台公園と言った整備された環境の下です。同様に広大かつ保全された当館園内も選ばれたのか、数年前から度々目撃されていたのです。緑色の独特な羽、頬と頭の赤が鮮やかな割に、けたたましい鳴き声で、見た目とのアンバランスさを醸し出します。但しその声は明確にその存在の方向を教えてくれるので見つけ易くはありますが…。

報告によれば、今年8月の調査で木を突きながら上るアオゲラ3体を確認したところ、その内の2羽がボサボサの頭に羽色が淡い幼鳥でした。



都市に増えてきたアオゲラ

まさしく園内で繁殖が行われていたのです。以前から園内では多種の野鳥が活動し、カラス等都市生活に馴れた鳥は子育ても行っている様子です。いよいよアオゲラまで営巣となれば、如何に園内が優れた人工林であるかがうかがえます。樹木が高低のバランス良く立ち並び、彼らが本来暮らしていた天然の森に匹敵する環境を整えたエリアと考えて良いでしょう。いささか手前味噌のニュースです。

どうでしたか? 3本のニュースは、都市の緑が人の手に委ねられ、その維持こそが多くの野鳥を招いていることを教えてくれました。近年浅間山エリアで広がるナラ枯れ病、抑制管理のため部分的に伐採される当館園内の木、常に改修工事等で景観を変える多摩川と、環境事情は決して安定することはありません。今後も府中にやって来る野鳥が豊富であり続けるならば、それは都市の自然が保たれている指標にもなります。野鳥が新天地に府中の市街地を目指し、順応してもらうためには、人の意識と行動が大きな援助となることは間違いないような気がします。

…以上、最近の野鳥トピックスでした。

[写真提供: 府中野鳥クラブ]

特別展 鮎 多摩川のアユみ

2023/2/4 (土) ~ 3/12 (日)

会場：本館 1 階特別展示室



1909年（明治42）撮影の観光鵜飼の様子。国分寺駅発で府中の料亭が行ったアユ漁見学ツアーの一環。



多摩川を遡上するアユ。川で孵化したアユは秋～冬に川を下り海で成長し、4～5月頃に遡上して戻ってくる。

府中市の南端を流れる多摩川は、流路延長138 kmの一級河川です。流域の人々にとって多摩川は、漁業利用、上水や農業用水としての活用等、生活するために欠かすことのできない存在です。

そんな多摩川に生息する代表的な魚がアユ（鮎）です。江戸時代には、とれたアユが一級品と評価されて市場に流通していました。将軍に献上されていたことも知られています。さらに、昭和初期までは「見せる漁」として、アユ漁を主軸とした観光産業もありました。

左上の写真は、明治時代に現府中市域で行われていた観光アユ漁の様子です。多摩川に浮かべた屋形船にお客を乗せ、鵜飼によるアユ漁を見せています。最後にはとれたアユを料理し、料亭で食べるまでがセットでした。鵜飼というと、夜に篝火をたく中、舟から1人最多で12羽の鵜を操りアユをとる、有名な岐阜県長良川の鵜飼を思い浮かべるかもしれませんが。しかし近代の多摩川では夜ではなく、明るいうちに鵜飼を行っていました。その方法も、2羽の鵜を従えた鵜使いと呼ばれる漁師と一緒に川に入り、たくみに鵜を操りアユを捕まえさせるやりかたです。徒鵜飼と呼ばれるこの方法は、府中だけでなく流域の日野や立川等でも行われていました。

もちろん、鵜飼のみが多摩川アユ漁の全体像ではありません。それ以外にも釣竿やモジと呼ばれる道具を使用したり、投網をしたり、様々な漁法が用いられ、たくさんのアユがとられていました。観光資源かつ、水産資源として知られていたため、アユは江戸時代の文献や絵画資料等にも登場する、多摩川を代表する魚だったのです。

しかし、名物だったアユは昭和初期を境にその数が減り、観光産業もなくなりました。そこには戦争の影響に加え、水量減少、水質悪化等、環境の変化が大きく関わっています。

それでは現在、多摩川のアユは過去の存在であり、いなくなってしまったのでしょうか？ いいえ、近年では水質の向上や稚魚の放流、養殖技術の発達等、さまざまな要因から多摩川のアユの数は再び増えつつあります。右上写真のように、春には多くのアユが多摩川を遡上します。そしてそのアユは一年を通じて野鳥のエサとなる等、そこに生息するだけで自然を豊かにし、生態系の一部を形成してもいるのです。

本展示会では、そんな多摩川とアユに視点を定めました。自然分野の紹介だけではなく、江戸時代以降におけるアユ漁に関連する歴史、アユのために使用した漁具等、多摩川とアユのかかわりを多角的に紹介します。
(佐藤智敬)

多摩川今昔

TAMAGAWA IMA MUKASHI

③合戦の勝敗をわけた川

歴史上よく知られた合戦では、しばしば山・川・谷などの自然地形がその行方を大きく左右してきました。多摩川もまた、軍事的な要衝となった歴史があります。

元弘3年(1333)、北条氏による政治への不満を抱えた新田義貞らによって攻められ、鎌倉幕府はおわりを迎えました。幕府滅亡の過程で数回にわたっておこなわれた戦いのうち、ターニングポイントとなったのが「分倍河原の合戦」だと言われています。これには、多摩川の存在が大きく関係していたようです。

室町時代成立とされる『太平記』という書物をもとに、元弘3年5月の合戦の流れをかいつまんで追ってみましょう。8日、義貞は鎌倉を目指して上野国新田庄(群馬県太田市ほか)で挙兵します。11日には、小手指原(埼玉県所沢市)で幕府軍とぶつかりますが勝負は未決でした。12日には久米川(現 東村山市)で義貞方が勝利、このとき幕府軍は陣の立て直しを図って分倍まで退き、援軍を依頼しています。15日未明には義貞らが分倍河原に押し寄せたものの、今度は幕府軍が勝利し、義貞らは堀兼(現 埼玉県狭山市)まで一度退きました。幕府軍はこのとき義貞らを追うことはなく分倍河原に留まり、油断した状態で一晚過ごしてしまったといいます。これを好機ととらえた義貞は、その日のうちに軍勢を増強し、16日の早朝4時に分倍河原へと奇襲をかけたのです。ここで態勢を崩した幕府軍はあれよあれよと鎌倉へ逃げ戻らざるを得なくなり、21日に北条氏らの自害という結末を迎えました。

このように一連の合戦で、「分倍」「分倍河原」の名がたびたび登場します。5月12日に幕府が援軍をしたうえで分倍に陣を張ったこと、15日に留まったこと(油断してしまいました)、そして16日に義貞らが分倍攻めをすぐに決断したことには意味があったと考えられます。大國魂神社の神主であった猿渡盛厚氏は、自著の



新田義貞らの鎌倉への道(本文に登場する地名のみ記載)

『武蔵府中物語』上巻で、「元来鎌倉は、北方に於ける防禦線としては、多摩川が第一線で、入間川が第二線であった」と述べています。上の拡大図でわかるように、分倍付近の多摩川は現在よりも北を流れていたと考えられています。分倍河原という場所に陣を構えた大きな一因として、「鎌倉を守るために多摩川を守る」という意識があったのでしょうか。それなのに…油断して義貞らに多摩川越えを許してしまったことが、合戦全体の勝敗をわけてしまいました。

この合戦からまもなく690年、分倍河原駅南側に建つ新田義貞像の勇ましさを仰ぐと同時に、合戦に巻き込まれた人びとを想うと悲哀を感じずにはられません。(石澤茉衣子)



太陽系惑星ツアー



⑦見える？ 見えない？ 天王星

「水・金・地・火・木・土・天・海」という呪文のような言葉、どこかで聞いたことがありますか？

燃やすごみの日を覚える呪文ではありません。この言葉は、太陽の周りを回る惑星たちの名前を太陽に近い順から並べたもので、今回お話しする「天」、すなわち天王星は、太陽から二番目に遠い星、ということになります。

「地」、私たちの地球は、太陽から3番目に近い星ですから、7番目の天王星は、地球から見てもとても遠くにあります。

前号までにご紹介してきた水星から土星までは、比較的地球に近く、太陽の光も届きやすいために、肉眼でも見るができます。そのためこれらの惑星は、発見史が残っていないほど古くから知られていました。

一方で、天王星やそれよりも遠い海王星はとても暗いため、望遠鏡が発明された後に見つかった惑星です。

天王星は1781年に、イギリスの天文学者ウィリアム・ハーシェルによって発見されました。ただし発見した当初、ハーシェルは、少しずつ位置を変えていくこの星を、惑星ではなく、彗星（ほうき星）と考えていました。

確かに彗星は、並び方がほとんど変化しない星座の星たちの間で、少しずつ位置を変えていきます。

「位置が変わる」という観察結果は、惑星に対しても当てはまるのですが、それまで数千年もの間、新しい惑星はひとつも見つかっていなかったために、ハーシェルは発見した星を新惑星とは思いませんでした。惑星は「水・金・地・火・木・土」のみ、という時代はあまりにも長すぎたのです。

その後、この星を多くの天文学者たちが観察

し直し、彗星の特徴とは違っていることに気づきました。

やがて、この星が実際にはとても遠くにあり、惑星の軌道を描いていることなどが明らかになったことで、ようやくハーシェル本人も、それが新発見の7番目の惑星であることを理解したのです。

発見者本人ですらその正体に気づけないほど、地球からは遠くて暗い天王星。ですが、実はまったく見えないわけでもありません。人間が肉眼で見える星の明るさの限界は6等級程度とされていますが、天王星は最も明るい時で5.6等級となります。

ハーシェルが発見した18世紀より前の人々の中にも、きっと天王星を見た人がいたはず。ハーシエルの観測以前にも、天王星を記したと考えられる記録もあるようです。

街灯りの影響が大きい府中市内では、残念ながら天王星を肉眼で見るとは難しいですが、光害の少ない、条件の良い海辺や山奥であれば、見られるかもしれません。

視力に自信のある方は、7番目の惑星、天王星の観察にチャレンジしてみてください。

(小林善紹)



2022年11月8日の皆既月食中、月の後ろに天王星が隠される「天王星食」が起きた。写真は直前の天王星と月。撮影地：府中市郷土の森博物館